

井伊家十代直幸の清涼寺参詣

な お ひ で
せ い り ょ う じ

彦根城博物館では、令和三年度から五か年計画で、「殿様の日常生活」の解明をテーマとする研究会を組織しました。現在は、分析の対象を井伊家十代直幸に定め、彼が彦根で送った日常について調べています。

その際、主な検討史料としているのが「側役日記」(彦根藩井伊家文書)です。これは、殿様の政務活動を側近くで補佐した側役(彦根藩士)が記した業務日誌です。この史料を分析することで、直幸の具体的な行動内容をはじめ、それが周囲に与える影響についても分かってきました。ここでは、彼が頻繁に行っていた清涼寺(彦根市古沢町)への参詣について紹介します。

曹洞宗寺院の清涼寺は、井伊家歴代の菩提寺です。そのため、井伊家では、当主が決まった日(歴代の祥月命日など)に参拝をしていました。直幸も、同寺への参詣は、家の当主として先祖を崇める上で欠かせない務めであると認識していたと思われる。ちなみに、直幸が初めて国入

りした宝暦六年(一七五六)六月末から、江戸へ出府するまでの約十か月間(閏月を含む)で、自ら参詣したのが三十四回、自身に代えて藩士に参詣させたものも含めると、六十三回にもなります。

では、参詣の当日、直幸はどのように過ごしたのでしょうか。明和五年(一七六八)八月八日の「側役日記」には、「五つ時御表へ御出遊はさる(午前八時頃、御殿の住居棟から御座の間(殿様の執務室)へお出になられた。)(中略)御家中出仕御通り掛け御請け遊ばされ、御座之間に入らせらる(出仕した家中のお目見を通りがかりでお受けになられ、御座の間にお入りになられた。四つ時前御湯召させられ、御上下召させらる(午前十時前頃、湯浴みをなされ、袴をお召しになられた。御玄関より御出、御駕、清涼寺へ御参詣遊ばさる(玄関よりお出になり、御駕籠で清涼寺へ御参詣になられた。)」とあります。

この記事でまず注目したいのは、直幸が清涼寺へ向かう準備をする中

で、家中のお目見を受けた点です。実は、同寺への参詣日には、こうした対面の方が頻繁に設定されました。殿様と対面する機会を調整する立場にあった藩士たちにとって、決まっておとずれる同寺への参詣日は、殿様へのお目見を設定しやすい日と認識されていたと思われます。

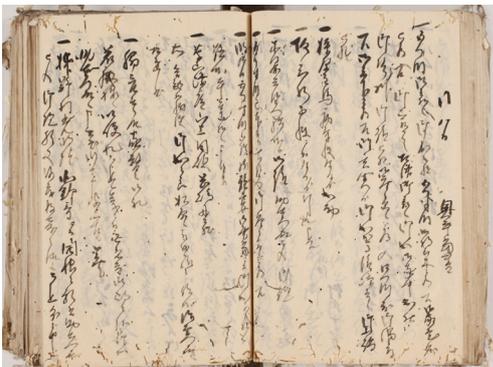
また、直幸が駕籠に乗って参詣した点も注目されます。同日記の宝暦十一年六月二十八日の記述には、「(前略)此御時節二付、御駕いた、脇之御すたれ町端迄ハおろし候様二仰せ付けらる(この「御時節」なので、御駕の板・脇の簾は城下の端までは下ろす様に、直幸がお命じになられた。)」とも記されています。

「御時節」とは、同月十二日に九代將軍徳川家重が亡くなってから間もない時期であったことを指しています。注目したいのは、直幸が喪に服す気持ちを示すためか、城下を通る間は駕の板や簾を下ろすように命じた点です。ここからは、「御時節」ではない日々の参詣の際には、直幸

の駕は板や簾を下ろさずに城下を通行したことがうかがえるのです。

また、同日記の別の記述から、直幸は数十人程度の供を率いて清涼寺に参詣していたと推測されます。彦根城下に暮らす人たちにとって、直幸の同寺への参詣は、領主の姿を直接目にするのできる機会だったのです。

【彦根城博物館学芸員 北野智也】



写真「側役日記」(明和五年八月八日部分)
(彦根藩井伊家文書、当館蔵)